

森鹿三先生を悼む

米 田 賢 次 郎

お盆をひかえた八月十日、森先生は忽然として不帰の旅にたびだされた。突然の訃報で、その時は、本当に茫然として、わけのわからない気持であって、お通夜、お葬式とすんで、ジワジワと悲しみと寂しさの加わってくる、今日このごろである。私がウルムチ→トルファン→敦煌→西安と、いわゆるシルクロード見学旅行の挨拶のため、七月十一日にお伺した時は、ウルムチでは何を注意して、トルファンと敦煌ではこの点をよく見て帰れ、等々平常通りの緻密な、行届いた御注意をいただいたうえ、「一昨年我々が見てきた秦の始皇帝の兵俑群の発掘は、その後どんなに進展しているかよく見てきて、帰ったら教えてくれ。寝ていなかったらわしも行きたいのだが……」と、大麥御元氣に送って下さったのに。本当に夢を見ているような気持である。ただ、旅行から帰って報告に伺ったとき、睡眠中でお目に掛かれなかったが、この間に病状が急激に悪化したのであろうか。先生は本年七十三才。現在では

まだまだの年令であり、特に卓抜な体力と、明るい放談に接してきた人々には、思いもかけぬ訃報であつたに違いない。

先生はつね日頃から、公私の区別の極めて厳格な方で、研究の面で内弟子ともいえる人に対しても、プライベートの面で弟子扱をする、ということとは決してなく、或いは随分と悩んでおられるのではないかと思われる時にも、それを人にもらされるといふようなことは全然されなかったので、私には先生の学者としての一面しかうかがいえないが、その面では、御自身の研究上でも、教育行政の面でも、また学界人との交わりの点でも、すべての面で人一倍の豊かな生涯であつたと思われる。先生は、水経注疏の文献学的研究に代表される中国歴史地理学の他、居延漢簡の研究、法制史学、古文書学、地図学、民俗学、本草学、日中にわたる古代類書の研究等々、渉らざる所なき博学の学究として学界の定評のあつた方である。その広い分野の中で、本草学者・東洋法制史学者として

も高い評価を得ていられることは周知のことであるが、矢張りその本領は、清朝考証学の基礎の上にたった、水経注を始めとする中国歴史地理書の文献学的研究と、文献学的素養を遺憾なく発揮して、常に学界をリードして、その指導的役割を果たしてこられた居延漢簡の研究であろう。極めて難解であり、かつ先秦から清朝・民国までの広い知識を必要とする水経注疏の研究については、先生はその第一人者というよりも、唯一の人ともいいうる存在であった。次々と発表された論文は常に学界の注目する所であったが、特に「戴震の水経注校定について」は、清朝考証学の高峰である張穆・楊守敬・王国維の三氏が、戴震は全祖望・趙一清両氏の説を襲うものとしたに対して、戴震の創意を摘出して、彼の評価を高からしめると共に、先生自身の歴史地理学者としての実力を、内外に知らしめたものとして著名のものである。

居延漢簡については、戦後いち早く、東光第二号（二十二年十一月）の「最近における中国学界の動向と題して」という一文において、その学問的価値について、学界に注目を促され、その後勞幹氏の「居延漢簡」考釈之部が我国にもたらされるや、京大人文科学研究所で居延漢簡研究班を組織せられ、その班長として本格的な研究に取組まれた。その後の先生の、「令史弘に関する文書」、「居延簡に見える馬について」、「居延出土の一冊書について」等に代表される諸論文は、その結論もさることながら、その研究方法において、居延漢簡の扱

い方の指針を示したものであり、またこの間に先生の指導を受けた人々の、木簡研究上の活躍を思うとき、先生こそ日本の中国木簡研究の育ての親、といっても過言であるまい。最近再び居延一帯から大量の木簡が発見され、木簡研究の再スタートが期待されている時、先生を失なったことは、何といっても痛恨事である。

一方また先生は、教育行政においても、京都大学人文科学研究所長、東洋学文献センター長、京都大学評議員を、また京都大学停年後は佛教大学において、文学部長、副学長、通信教育部長を歴任、さらに文化財保護審議会専門委員に任せられ、各々の場で多くの功績を残されたことは周知のことであるが、特に人文科学研究所長は三期五年にわたり、その間、東洋学文献センターを研究所に併立せられたことは、東洋学関係者の記憶にとどめられることである。佛教大学に赴任された後は、文学部史学科の大学院設立に鋭意努力され、本学の文学研究科が、独立した日本史、東洋史二部門の博士課程を持つという、他の私学に数の少ない大学院を持つことが出来たのも、先生の努力と学界における評価が基盤になったことはいうまでもない。

先生は豪放磊落、談論風発、その上斗酒なお辞せずで、東洋学界での最左利の一人で、宴会ともなれば二次会・三次会……、ハシゴの程に、益々頭と舌の廻転が早くなり、常に身辺に爆笑をまき起させていた。時には周囲の弟子共の論文

を俎上にのせ、急所一発、空中分解させることを得意芸とされ、私も何度かその直撃にあった。しかしその批評には必ず逃げ道をあけられ、また必ず励ましとともに次の論文の指針を与えることも忘れられなかった。先生がその広い学問分野の各々で多くの友人・子弟に愛され慕われて、学界の一方の雄として活躍されたのは、この寛と嚴との両面を所有されていたからであらう。

思うに先生は、寛と嚴のみならず、鋭い洞察力・創造力、絶倫の記憶力、豪放磊落の反面細心の注意力、あくまで筋を通す一面、相手に救いの手を忘れぬ気持等々、一見相反するような、それも我々がその一面をも持ちたいと願う美点を纏めて持っておられた。このことは恐らく先生が各方面で、充実した生涯をおくりえた最大の理由であらう。

「森鹿三先生を悼む」にあたって、在りし日をいろいろと振り返ってみたが、先生の像の廻りをさまようのみで、とうてい先生の像に手のとどかない気持である。それは先生と私の差を改めて示す以外の何物でもないが、寛大な先生は、「弟子は師の半芸に及ばずか」と、苦笑しつつ許して下さるであらう。因みに先生の御法名は、

廣文院博譽鹿苑大道居士

である。先生の学問の広さをあらわした御法名である、というべきであらう。

(よねだ けんじろう 文学部教授)

